
魔法先生ネギま! ~ 幻想郷から麻帆良入り ~

@レイク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ ～幻想郷から麻帆良入り～

【Nコード】

N6490U

【作者名】

@レイク

【あらすじ】

幻想入りしたのにとある事情でネギま！の世界へ。

おいおい、原作なんてほとんど覚えてねえぞ！？

この小説は作者のもう一つの小説、「東方喧闘記」とのクロス作品です。なのでちよくちよく東方キャラが出てきたり、というよりネギま！の皮をかぶったなにかですので、それが嫌な方はブラウザバックでお願いします。

超駄文の上、東方の方の作品の息抜きなので更新は途轍もなく遅いです。

キャラ説明（前書き）

喧闘記キャラの説明です。

現在第4話時点。

キャラ説明

名前：武幻 恭（むげん きょう）

年齢：400歳と少し程度

備考：

幻想郷になぜか幻想入りした人間。

本作の主人公

喧闘記では1600年代にまで過去に遡り幻想入りしたため、現在は能力を使い不老不死になっている。
ちなみにさとりと結婚している。

強さでいえば、原作キャラにはまず負けない。

バグキャラ？なにそれおいしいのレベルの理不尽さでねじ伏せる程度の強さ。

けど、積極的に原作に関わらせると野菜の出番がまったくと言ってなくなるため、基本裏で動く予定。

野菜だけでどうにもならない場合と、生徒が関わる場合のみ前線に出る。

・・・ほぼ全部じゃね？って声は無視しましょう。

現在刹那を魔強化中。

バグキャラ並み程度に強くなる予定。

名前：八雲 紫（やくも ゆかり）

年齢：BB（ピチューン

備考：

言わずと知れたスキマ妖怪。

能力チートの一人。

しかしながら、恭や後述の無界、龍神、ルーミアに比べると残念な気がしてならない。

能力は『境界操る程度の能力』

境界とつく物ならなんでも操れるというチート能力。

だが、本人自体はそれほど身体能力は高くない。

曲がりなりにも大妖怪なので、人間程度よりは比べ物にならないほど強いが。

現在、龍神らと刹那を教育中。

結界の管理は藍が頑張ってます。

名前：龍神

年齢：不明

備考：

幻想郷で崇められる神。

人前に出るときは人型をとる。

幻想郷のほぼ全土で長く信仰されてきたのは伊達ではなく、幻想郷でも屈指の強さ。

人型では幾分力が落ちるが、それでも人を相手取るなら十分すぎるほど。

能力は『創り出す程度の能力』

文字通り、なんでも創造できる。

例外として、体力を創造できない・傷の治癒は出来ない（皮膚を創り出して治す、肉を創り出して治す事が出来ない）

現在、紫らと刹那を教育中。

普段ふらついてるから、いてもいなくても問題ない。

名前：岩洞 無界 （がんどう むかい）

年齢：数万歳

備考：

最強。

と言いたいけど、今は残念ながら一部能力を封印中。
作者が一番好きなキャラ。

鬼の大将にして神。
鬼神の名は伊達じゃなくて、封印状態でも幻想郷五指に入る程度には強い。

能力は『石化させる程度の能力』と『石を操る程度の能力』
能力封印中であるため、この二つの能力である。
本来の能力は、この作品では出ない予定。
ただでさえ恭でインフレ起こってるっていうのに・・・

現在、紫らと共に刹那を教育中。
鬼は思界が纏めています。

名前：ルーミア

年齢：聞いちゃダメだよ

備考：

闇の妖怪。

いわゆるEXルーミアに常時変身可。

普通の状態でも、原作のと同じ子供になっていない。

やっぱり強いお方。

実力は紫以上龍神以下。

武器はストームブリンガー。大剣を使う。

能力は『闇を操る程度の能力』

自分で操って前が見えないとかはないです。

闇を物質化させて武器や防具、拘束具とする事も可能。

闇に包まれていると、力を吸われていくという作者設定。

現在、刹那を教育中。

とくに言うことなし。

名前：風魔 雷光 （ふうま らいこう）

年齢：不明

備考：

天狗の長である天魔天狗。

喧闘記ではまだ出番がほとんどない人。

無界とは、部下の天狗（鬼）の前だと下手に出るが、二人だけの時や知り合いだけの時は割と碎けた感じになる。

強さ的には紫と同じくらい。

速さでいえば幻想郷最速であり、比べること自体が間違っている。

力自体はそれほど強くないが、その速さで威力をあげている。

能力は『光になる程度の能力』

光に関するものならなんでもなれる。

その気になれば、赤外線や紫外線などの不可視光になれるので結構

応用も利く。

その他にはレーザー光や絶対に反射しない原理の不明な光線など。
直線的に動く光にもなれるし、変則的に動く光にもなれるという世界の法則に喧嘩売ってる人。

現在、紫らと刹那を教育中。

天狗の里は部下の大天狗が仕切ってます。

名前：魂魄 妖忌（こんぱく ようき）

年齢：1000歳以上

備考：

妖夢の祖父。半人半霊。

唯一チートな能力や身体能力を持っていない人。
ただし技術だけは神の領域に片足突っ込んでる。

強さ的には頑張れば他のチート連中と並べる。

体も人の域を出てないのに技術だけで並んだ物凄いお方。

剣術だけでなく多分誰にも負けない。

能力は『剣術を扱う程度の能力』

妖夢と同じ能力だけど、レベルが違う。

二刀流はもちろんのこと、一刀流、無手、足技のすべてを人並み以上に扱える。

白桜剣と桜観剣は妖夢が持っているので、紫がどこぞから持ってきた“迦具土”“不知火”を使っている。

現在、紫らと刹那を教育中。

旅の途中で呼び出されたので、周りに影響なし。

同じ剣を扱う者として、詠春や刹那、月詠とからませていきたいなあ。

名前：古明地 さとり （こめいじ さとり）

年齢：聞いちゃいけんよ

備考：

恭の嫁。

もとい地霊殿の主。

恭が守ると誓った人。

戦闘力は人よりは戦える程度。

さとりが巻き込まれそうになったら、恭が出張ってくる。

現在、恭の癒し成分としてネギま！世界に召喚。
順調にお二人の関係は進んでいるようです。

キャラ説明（後書き）

妖忌の刀はそれぞれ“かぐつち”“しらぬい”です。
それぞれ、某ハンティングゲームから付けました。

喧闘記にすら出てない妖忌さんですが、割とチートと化してます。

プロローグ（前書き）

喧闘記が全く思いつかないので息抜き作品です。

続き思いつくまでこっち更新するかも？

プロローグ

「って事でちょっと向こうの世界行ってきなさい」

「あ？いきなり何言ってるんだ。ついにボケたか？」

まあ、仕方ないよね。もう千年二千年じゃ済まないくらい生きてんだから・・・

「・・・殺されたいのかしら？」

「いやいや、いきなり向こうの世界行って来いとか言われても意味分かんねーから。」

いきなりんな事言われたら頭おかしくなったのかと思うのは当然じゃないか」

「その辺はその場の空気で分かりなさいよ。
まあいいわ。説明してあげましょう。」

手っ取り早い話、近々この世界に良く似ているけれど全然違う世界で「魔法世界」という物が消滅する危険があるの。

その魔法世界は、その名の通り魔法で作られた世界。いわば幻想その物の物。

消滅するだけならまだ良いんだけど、下手をすればその世界ごと幻想郷に流れ着くなんて事もありうるから、その消滅を食い止めてきなさいって事よ」

・・・世界間超えて幻想入りってどんだけ広い範囲で結界の効果出てるんだ。

ていうか魔法で世界作るなんざハンパなエ事してんなその世界の奴ら。

って、んな事どうでもいいや。

つまり、さすがに世界ひとつが幻想入りするのはマズイから、その可能性を潰すために消滅を止めてこい、と。

「どう？行ってくれないかしら？」

「オーケーオーケー、行ってもいいが、その前に一つ。その魔法世界ってのが幻想入りするとどうなる？」

「世界が混ざり合って全く違う世界になるわね。後、その世界の《立派な魔法使い》（マギステル・マギ）と呼ばれる馬鹿共が妖怪を駆逐しようともするでしょう」

駆逐って・・・

って事は俺達の安息の日々のためには行かなきゃなんねえって事かい。

妖怪の山の奴らや鬼はともかく、さとり達は割と強めな人間だと勝ち目ないからなあ・・・
リアに全部任せりゃいいだけの話だけど。

ていうか立派な魔法使い？どっかで聞いた事あるような？

「よっしゃ、分かった。とつと送ってくれ」

「ええ、分かったわ。

貴方が行くのは麻帆良学園と呼ばれる学園都市。そこで英雄の息子と仲間に会いなさい」

「はあ！？ちよつ、それネギうおわああああああああああ
ああ」

プロローグ（後書き）

ネギま入りの理由付けのお話でした。

第一話（前書き）

学園入り。

あと、書き忘れていましたが恭は喧闘記初期（1話目）から約40年後、西暦2000年くらいから飛ばされます。

第一話

「イデッ」

「ひょっ!？」

「まったく、紫の奴いきなり足元にスキマ開きやがって・・・
おかげで顔面ダイブなんていう珍しい事やっちゃったじゃねえか。」

「んあ・・・ああ？」

「周りを見回す。」

「するとそこには・・・」

「・・・ぬらりひょん？」

「ワシ人間!! 妖怪ちゃうから!!」

「ぬらりひょん、別名学園長近衛近右衛門が居た。
って事はもう麻帆良に居るのか。」

「本格的にネギまの世界っぱいなあ・・・」

「東方の世界に居た俺が言える事じゃないが、色々信じらんねーな。」

「あ、あゝと、いきなり失礼しました。」

「俺は武幻恭、とある事情でこちらに飛ばされてきました。以後お見知りおきを」

「ふむ、ワシは近衛近右衛門、この麻帆良学園の学園長をしておる」

者じゃ。

それで、君が言ったとある事情とはなにかの？」

警戒は・・・結構されてるな。

ま、当り前なんだが・・・その値踏みするような眼はやめてくれねえかな。

「では説明をさせていただきましようか」

説明はカットでお願いします

「——なるほど、あい分かった。時が来るまで君はこの学園に住むがええ。

住居については後で用意しよう。仕事については・・・後で話そうかの」

とりあえず、話すと面倒な部分（幻想郷とか魔法世界の崩壊とか）はぼかしたり、ごまかしたりで説明。

さすがに「もうすぐ魔法世界が消滅するかもしれないんで、それ止めに違う世界から来ました」なんて言ったら救急車呼ばれる。ていうか俺ならそうする。

一応言っておくと、俺が来た理由は「知り合いに頼まれて、英雄の息子を影から助ける事。後ついでに高畑教諭にも会ってくる事」って事にしておいた。

余り覚えてないが、紫が最後に言ってた「英雄の息子」はネギで確定、「英雄の仲間」はタカミチだろう。

んで、ネギま！の主人公はネギ↓魔法世界の消滅なんて一大イベントにネギがストーリーに絡んでこない訳がない↓ネギと居れば情報来るだろう、って俺なりに考えた結果こうなった。

「ああ、それは助かります。何しろこちらには住まいもないうえ、知り合いもいませんから」

「うむ、所で恭君の話からみて、戦闘はある程度出来ると思ったのじゃが、ここの警備を引き受けてくれんかの？」

ここは特別な霊地で、魔物や敵対組織・・・とくに関西呪術協会から狙われておるんじゃ。

魔法先生方も頑張っておられるが、正直人手不足なんじゃ。どうかの？」

「まあ、そのくらいなら。自分なら出来るのに何もしないで見てる、つてのは私の主義に反しますしね」

「おおつ、引き受けてくれるか！
では仕事の話なんじゃが・・・先生とかどうじゃ？」

「はっ？」

何言つてやがんだこの爺。

いきなり現れた住所不定無職の不審者を教師だと？
その奇怪な頭ん中どうなつてやがる。

「いやなに、ネギ君の補佐をするならばなるべく近い方がいいじゃろう？」

ならば先生になるほうが良いと思うのじゃが？
教員免許を持っていなくてもどうにかするが、どうじゃ？」

「あ、ああ、そういう理由ですか。
ちゃんとした理由があるなら引き受けさせていただきます。教科は英語ですか？」

「うむ、英語が出来ぬのなら他の教科でもよいが？」

「いえ、一応全教科教えられる程度の知識はあるとは自負していますので」

正直、利用してやろうって魂胆が見え見えだけだな。

けど、ここで下手を打って動きづらくなるのは俺としても困る。
なのでここは素直に引き受けておく。

「うむ！ネギ君が来るまでは高畑君に代わり2・Aの担任、来てからは副担任をしてもらうぞい。
住む場所は・・・女子寮の寮監室しか空いておらんがそこでよいかな？」

「いや、常識的に考えてダメでしょ、そこは」

ていうかバレたら殺されそう。

寧ろ殺される。死んでも死なないけど殺される。

「断られると住む場所がないがそれでもよいのかの？」

「・・・はあ、もういいです、そこで」

この狸は断ってもなにかしら理由付けてこっちが承諾するまで言っ
てきそうだ。

なら、こちらへんで飲んでおくのがいいだろう。

「ではタカミチ君他先生達にはワシから話を通しておこう」

「ありがとうございます。それじゃ、私は授業の準備もあるので失礼させていただきますよ」

「案内はいらぬのかの？」

「要りませんよ。これから住む場所を見て回りたいですしね。それに、場所が分からなくても人に聞けばどうにかなるでしょう？」

「ふおお、そうかそうか。ではまた後日の」

「はい、失礼しました」

さつて、どこから見て回ろうか。

まずは女子寮の場所確認して、軽く近くを散策でもいいかな・・・

第一話（後書き）

てな感じの歯切れわりい終わりです。

口調が違うのは恭の性格上の問題です。（一応目上には敬語）
多分2 - Aの面々とはもっと碎けた口調にはなります。

第二話（前書き）

学園に赴任。

ご都合主義なのは毎話の事

第二話

・・・うわぁ。

なんていうか、うわぁ・・・

紫にこつちに落とされてから1週間ほど経った。

その1週間は教師としての教材の確認他、滞りなく教師としてやっていけるようにの準備期間だった。

その時にタカミチとも知り合った。

そして、今日は俺がタカミチから担任を受け継ぎ、2-Aとの初めての顔合わせ・・・なんだが・・・

「貴方の受け持つクラスの名簿です」

「へえ、結構人数多いんですね」

「早く顔と名前覚えなさいといけませんね？」

「ま、大丈夫でしょうよ」

隣にいるのはしずな先生。

素晴らしい母性のお方である。どこぞの門番並みにでけえ。

「賑やかですねえ。賑やかなのは好きですよ。

この変なトラップのようなものさえなければ」

隠してるのかどうかしらんが、俺一応空間も操れっからね。その関係上何があるかも分かるんだわ。

「さて、では俺の受け持つクラスの面々はどのようなもんなんだろ
うねえ」

ノックをして教室に入る。

すると、黒板消しが落ちてくる・・・

がよける。

次々とトラップが発動し、俺に襲いかかってくるが全てを避ける。こんなもん防ぐ価値もないわ。

「お」

で、なんでみなさんそこで関心するかね。

「では恭先生、自己紹介をお願いしますね」

しずな先生はしずな先生でスルースキル高いな、おい。

「今日から出張が多かった高畑先生に代わり、このクラスの担任になった武幻恭だ。」

高畑先生の受け持っていた英語も俺が引き継ぐ。よろしく」

「
「
「
「
「
かつ
・
・
・
「
「
「
「
「

か？蚊？

ていうかなんか嫌な予感が……

「「「「「
 かつこいー!!
 「「「「「

「何歳ですか!？」

「20代だと思ってくれていい」

「どこに住んでるんですか!？」

「女子寮の寮監室だ。何人かは顔も合わせてるだろう」

「大学は!？」

「言っても分からんだろうから言わん」

「えー」

すっげえ勢いで騒いでんな。

ていうか質問多すぎだ!聞き取れるのは答えたがほとんどは聞き逃したぞ。

これは一回静めるのがいいか。

「良いから静かに!しずな先生、この時間は質問の時間にしたいんですが、いいでしょうか?」

「ええ、学園長にもそうしると」

「分かりました。では代表誰か一人決めて質問集める」

「では、不詳ながらこの私朝倉が質問をまとめさせていただきます」

「んじゃ纏める時間は長くなりすぎないように、はいスタート!」

「時間だ。朝倉、質問を」

「はいはい。ではまず名前、身長、体重、受け持つ教科をお願いします」

「武幻恭。身長と体重は測ってないから知らん。けど、前図った時は180の70くらいだったか。受け持つのは英語だ」

「ふむふむ、では次の質問。趣味と特技は？」

「趣味は読書と動物鑑賞。特技は・・・しいて言えば体を動かす事か」

「なるほど、では最後の質問です。このクラスで気になる人は？」

「桜咲、龍宮、絡繰、マクダウェル、レイニーデイトとところだな」
「だってこいつら人間じゃねえし。」

「「「「「おおおおおおおっ!!」「」「」「」」

名前挙げた奴ら全員ポカーンって感じの表情になってんな。いや、

ザジだけは何考えてるかわからん。

ま、当り前か。いきなり現れた奴に気になるのは？って言われて自分の名前呼ばれたたら。

キーコンカーンコン

「と、丁度だったみたいだな。では次から質問がある奴は俺に直接聞きに來い」

そう言い残し、教室を出る。

教室から聞こえてくる声からして、長瀬と古菲らへんは近々俺に勝負でも挑んできそうだ。

「お疲れ様です。どうでしたか、貴方のクラスは？」

「ええ、元気があっitingいいですね。教えがいもありそうです」

「ふふつ、そうですか。頑張ってください」

「ははは、精一杯がんばりますよ。では失礼します」

「あら、どちらへ？」

「高畑先生と授業についてちょっと。

まだまだ私は新任ですし、引き継ぐ所もちゃんとしておかなければならぬですし」

「そうですか、ではまた明日」

「はい、また明日」

「んで、タカミチ、大体は生徒に訳させて、間違ってる部分を指摘。あとは構文や訳す時のアドバイスって事でいいのか？」

「うん、大体そんな感じでいいと思うよ」

「よっし、それじゃあお疲れ！俺もう帰るわ」

「ああ、ちょっと待って。今日の夜10時、世界樹広場に来てほしいんだ。
恭も警備員として動くんだから、顔合わせと実力のお披露目、ってところかな」

「あー、分かった、起きてりゃ行く。じゃな」

「ちょ、起きてればって・・・」

後ろでなんかタカミチが言ってるけど気にしない。

俺は疲れたのだ。

けど顔合わせか・・・出とかないと面倒くさそうだな・・・

「うーす、こんばんわー」

タカミチに言われた通り、世界樹広場に集合した。
着いて回りを見渡すと、結構な人数が居た。

その中には龍宮や桜咲、ここにはいないがちょっと遠くでエヴァン
ジェリンと絡繰が居る。

「ふお、来たか。では早速始めるとするかろう」

「とつとと始めるぞ。眠いんだ。誰が相手だ」

「僕だよ、お手柔らかにね。恭」

「タカミチか。本気で来いよ？」

正直、タカミチに本気で来られても10秒以内に片づけられる自信
はある。

強いとは思っけど、それでも人間レベルの強さだし。

「では始めようか。合図はいらないだろう？いつでも来い」

「では遠慮なく・・・！」

そう言いながらタカミチはポケットに手を入れたままだ。

・・・あれがあいつの構えか？珍しい構えだが、あれは・・・

「居合い拳、か。珍しいな」

聞こえないように呟く。

数十年も前だったか、あれを使う者とやりあった事があるが、高速

拳術だったか。

ならば安易に近づくのは危険だな・・・

とか考えている内に、タカミチはまだ距離もあるというのに拳を放つ。

「つて、うお！」

なにかが飛んでくるのを察知し、とつさに防御する。

あれは・・・タカミチの攻撃か？

飛ぶ拳撃ってどういう原理だよ・・・

「初見で見切るなんてやつぱりすごいね、君は」

「居合い拳自体は初見じゃねえけどな。飛ぶのはビビったが」

けどなんかまだ隠してる気がするな。

まあいいか、それで負けたんならタカミチが馬鹿だったって事でいいや。

「んじゃ次こつちから行くぜ？」

降り注ぐ居合い拳を避けつつ、少しでもタカミチとの距離を詰める。弾幕に慣れてなかったら当たってたかもな、こりゃ。

「さて、俺も時間が惜しいんでね。一気に片付けさせてもらおうか。

攻符『回転万花』」

宣言した瞬間、周り全てを埋め尽くすほどの弾幕が形成される。回転万花、数と速さに重点を置き、弾幕が相手を中心に回り始め、だんだんとその円が小さくなるというシンプルな物だ。

ちなみに今回はHard。

なので、結構多めだし、速さも中々である。さすがにLunaticは自重しておいた。

「さて、チエックメイトだ」

タカミチはまだ何かしようとしているが、時間が圧倒的に足りない。やがて弾幕の渦に飲み込まれ、ダウンした。

「もういいよな？じゃあ俺は帰るから」

空気になっていた魔法先生はタカミチの具合を確かめたり、俺の素性を学園長に聞いたりしているようだ。

気のせいかな桜咲の視線に敵意が混じってた気がする。

エヴァンジェリンもなんか不穏な視線を送ってきてたし。

「まあいいか」

それよりなんでエヴァンジェリンはあんな呪いだかなんだか受けてんだろうな？

ちよっと聞いてみるのも良いかもしれない。

第二話（後書き）

タカミチの口調がワカラナイ

そして自分でも何が書きたいのかワカラナイ

次はエヴァの登校地獄と学園結界の解除かな？

第三話（前書き）

作者暴走勃発

投稿遅れたのは僕のせいじゃないんです！

モンスターをハントするフロンティアなゲームが大討伐なんてのをやってるからいけないんです！

・・・はい、ゲームやってたら遅れました、ごめんなさい

第三話

「悪魔に村を襲われ、その時に父親であるナギに助けられる。その時の事を胸に、父のような立派な魔法使いになる事を決意する。それから魔法学院を主席で卒業、主に攻撃魔法を学んだ。だが、父親の事以外は興味を示す事が余りない。村の人々は今、石に変えられており、ネギはそれを治す術を学ぶ素振りを見せなかった、と」

さとの能力を使い、学園長やタカミチから集めた情報と、紫をパシらせて得た情報を整理していく。だが、見れば見るほど俺は好きになれそうになれない性格だ。

なぜ村の人々を救う手段を考えない？

魔法学院を主席で卒業出来るほどだ、頭は悪くないのだろう。ならばなぜその才能を攻撃魔法にしか生かさない。

その才能があれば、時間がかかったとしても治す方法が見つかるだろう。

「子供のころに憧れるヒーロー、って奴か」

それに加え、子供のくせに怒られるという事を知らないらしい。

周りの人間は事ある毎に「ナギの息子だから」とか「英雄の息子だから」という理由で甘やかしていたようだ。

そんな育ち方をして、どんな風に歪んで育つのか想像がつかないのだろうか？

「面倒な事だ・・・さとり、俺もう帰りてえよ」

不意に、幻想郷の愛する人が頭に浮かぶ。

そういえば、彼女には何も言わずにこっちに来てしまった。今頃どうしているだろうか。

もし危険があっても、リアを残しているからよほどの事がない限り大丈夫だと思うが、これだけ長い間離れるのは久しぶりだ。

近い内、紫に頼んでこっちに連れてこれないか交渉でもしようか。

そんな事を考えて、気が抜けていたのかどうなのか。

近づいてくる人影に気づかなかった。

「恭先生」

「ん、ああ、絡繰か。どうした？」

その人影は絡繰茶々丸だった。

こんなところにいるなんて珍しい。

というのも、俺が居るのは女子寮の寮監室の前だ。

絡繰は寮に住んでいる訳ではないので、ここに居るのは珍しい。

「少しお話があります。ついて来ていただけないでしょうか？」

「ん、いいぞ」

絡繰が来た、という事は十中八九エヴァンジェリンも絡んできているだろう。

と言うよりも、絡繰がエヴァンジェリンの使いか？

ま、そんな事はどうでもいいか。

さて、こちらの世界の吸血鬼はどんなお方かな？楽しみにさせても

らおう。

「よく来たな、先生。歓迎しよう」

「御託はいい。何の用だ？吸血鬼さん？」

「ほう、バレているか」

「そりゃな。吸血鬼ってのは自分で思ってるより分かりやすい存在だぜ？」

「ふつ、そうか。まあそんな事はどうでもいい。
それより本題に入ろうか。貴様は何者だ？昨日、貴様が使った魔法
いや、あれには魔力が感じられなかったから魔法ではないか。あれ
はなんだ？」

「一つ目の質問、俺は何者か？簡単さ、俺はただの長生きな人間だ。
二つ目の質問、あれはなにか？あれはスぺルカードと呼ばれるもの
だ」

「スぺルカード？それに長生きとは貴様一体・・・」

「それは後で教えてやる。次は俺の質問の時間だ。
お前にかかつてる呪いはなんだ？あんな滅茶苦茶な術式みた事ない

ぞ。どこの馬鹿がかけた呪いだ？

それと、学園の結界とお前にパイプが繋がってんのはどういうことだ」

「ちよつと待て！私にかかっているのは『登校地獄』の呪いだけのはずだぞ！なぜそこで結界の話が出てくる！」

「あん？知らなかったのか？

そもそも登校地獄ってのは名前からして登校を強制するだけのものだろ。

そして吸血鬼のお前がそんな弱いなんてのは考えられない。

だから疑問に思った俺は少し細工して調べてみた。

そしたら結界とお前にパイプみたいなもんが繋がってて、お前の魔力が結界に流れ込んでた、って訳だ」

「なっ・・・まさかあの爺が・・・」

「まっ、今は結界とお前を繋いだ人間は誰かなんてのは横に置いておこう。

ここでエヴァンジェリン・A・Kマクダウェル。君に一つ交渉を持ちかけたい」

「・・・なんだ」

「こちらが出す対価は登校地獄とやらの解呪と、結界と君の魔力の分離。

そちらに求める対価はあるガキを表からサポートしてもらいたい」

「なに！？お前に呪いが解けるのか！？」

「ああ、解ける」

「というか、壊すんだけどな。」

「よ、よし。それでとあるガキというのは？」

「ネギ・スプリングフィールド。大戦の英雄、『千の呪文の男』ナギ・スプリングフィールドの息子だ」

ネギの名前を出した途端、エヴァンジェリンが驚いたような顔をする。

だがすぐ元に戻り、冷静に話し始める。

「私は悪の魔法使いだぞ？そんな私に立派な魔法使いを目指す奴のサポートを頼むと？」

「ああ、そうだ。実際、この学校の正義の魔法使い様には任せられない。

あいつらには信念や覚悟が足りない。

正義は負けるはずがない、悪は正義に裁かれなければならない。

悪だから裁く？正義だから負けるはずがない？そんなわけあるはずがないだろう。

正義の裏は別の正義。悪の裏もまた然り、だ。

正義なんて曖昧なものに酔って、なにをするのかすら見失っているような奴らでは信用なぞ出来るはずもない。

そして、その点マクダウェル、君は誇り高き悪だ。

誇り高き悪の魔法使いと見込んで頼もう。ネギをサポート、具体的には魔法を教えてやってくれ。

俺は魔法なんざ使えないからな」

む、素直に褒められるのに慣れてないのか少し顔が赤い。
ううむ、こういうのをみると弄りたくなるんだが、今は我慢しておこう。

「・・・分かった。ただし、貴様が解呪出来た時だけだからな」

「お任せあれ」

使う能力はフ란の「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」。あれは文字通り全てを破壊できる能力だから、コントロールさえ出来ればかなり便利な能力だ。

「えーと、これか？ああ、これだな。あとは結界とのラインを破壊して・・・よし、完了だ」

「フフフ・・・ハーハツハツハ！！！！力が漲る！漲るぞおおおおおおおおおお！！！！」

「うるせい」

ガンツと突然叫び始めたエヴァンジェリンの頭を殴る。

「何をする！？」

「いきなり叫ぶな。で、ネギの事は任せたぞ。
あとこれはサービスだ、受け取っとけ」

「これは？」

「封印符。下手に呪いやらなんやらが解けたのがバレるのは好まし

くないだろう？

その効力は折り紙つきだ。なんせ、世界の闇を司る大妖怪を封じ込めたり、魔王を封じたり出来る代物だからな」

「なんで貴様はそんなものを持つてるんだ・・・」

「ふむ、それも含めて話そうか」

そして俺は過去を語る。

幻想郷という場所。

さとり達地底の妖怪達。

天魔達妖怪の山の妖怪。

博霊達人里の人間。

そしてそれと共に歩んできた俺の一生。

「——— なんとというか、信じられんな。貴様本当に人間か？」

「ハハッ、お前と同じ小さな吸血鬼に同じ質問をされた事があるな。ならば俺はあの時と同じように返そう。俺はまだ人間をやめたつもりはない」

「クツクツク、やはり貴様は面白いな」

「そりやどうも」

そんな風に二人で笑い合っていると、扉からノックの音が響いた。エヴァンジェリンが許可を出すと絡繰が入ってくる。

「失礼します。マスター、夕食の用意が出来ました。恭先生もご一

緒にどうぞ」

「もうそんな時間だったのか。俺も一緒にいいのか？」

「別に構わないだろう。それにもう料理は出来ているのだ、食べていくがいい」

「なら頂いて行くよ」

絡繰に案内されて、ダイニングへと移動する。

案内されたダイニングのテーブルには、とても美味そうな料理が並んでいた。

絡繰に促されて、席に着くが、当の絡繰本人は座らない。

「絡繰、お前も座らないのか？」

「私はガイノイドですので食事をとる必要はありません」

ガイノイド？ってのは良く分からないが、たしか絡繰はロボットだったか。

しかし皆食ってる中一人立たせてるってのもな・・・

「取る必要はない、って事は別に食えるんだな？なら一緒に食べばいいじゃねえか」

「ですが・・・」

「あゝあゝ、御託はいいんだよ。とにかく座れって。そして食べ」

絡繰の肩をつかみ、無理やり座らせる。

無理やりつてのもどうかと思うが、食事つてのは人数が多ければ多いほど美味いもんだろ。

それに、食う必要がないから食わないなんてのは、余りにも寂しいじゃないか。

「ふむ、ロボットだから味も分からんよな・・・
なら特別サービスだ。今だけ味覚を教えてやろう」

俺自身の能力を使い、俺の味覚と絡繰の味覚を同じにする。
体に対応すれば、俺の見た目になるし、今だけっていう条件にしたのも、若しかしたら俺の味覚が狂ってるかもしれないからだ。
それなら超あたりに新しく全て作ってもらった方がいいだろう。
あいつの頭脳はすでにこの世紀を超えてるし、多分作れるだろ。

そんなこんなを思ってるうちに、絡繰が料理に手をつける。
そして驚いたような表情になる。

「っ！おいしいです・・・」

「お前何をしたんだ？」

「俺の味覚と絡繰の味覚に対応させて、俺の味覚と絡繰の味覚を同じくらいにした」

「良く分からん能力だな、貴様のは」

うるせえやい。

そんな事を思いつつ、俺も料理を口にする。

「うん、美味しいな」

食べ終わってから、またエヴァと少し喋ったり、茶々丸と喋ったりした。

その時に、エヴァからは「エヴァと呼べ」と言われたり、茶々丸からも「茶々丸とお呼びください」と言われたりした。

まあ、そんなこんなで良い時間である。

もう子供達も寝静まったろう時間だし、俺はエヴァの家を出て寮へと歩いていく。

そんな折、不審な気配を感じた。

「これは・・・侵入者か？それにしても数が多いな。たしか今日の割り当ては・・・」

学園長から支給された警備の割り当て表を思い出す。

魔法先生なら放っておいても良いかも知れんが、生徒ならちょっとヤバいかな、程度の数が侵入してきている。

そして今日の割り当ては・・・

「桜咲と龍宮か・・・あの二人なら放っておいてもよさそうな気はするが、せっかく見つけたし手伝いに行こうかね」

そうと決まれば早い方がいい。
靈力で体を強化し、森を駆ける。

・・・恭side out

・・・真奈side

「くう・・・数が多すぎるね・・・！」

学園長に聞いた話では、10 20程度だった。

それが50やそこらでは片付かないほどの多さになっている。
持ってきていた予備の弾薬も使い切り、このままではジリ貧は必至だ。

刹那も大きな傷を負ってはいないけど、それでも傷は増えている。
学園長に連絡を寄こしても、応援が来るまで持ちこたえられるかどうか・・・

そんな時だった。

一筋の光が敵の中に差し込んだと思えば、その敵の中には新しく私達の担任になった教師が立っていた。

「ッ痛う・・・やっぱ雷光のは使いづらいわ・・・」

いきなり出てきて何を言ってるのだろう？この人は。

・・・真奈side out

・・・恭side

「ッ痛う・・・やっぱ雷光のは使いづらいわ・・・」

良く考えれば、雷光の能力を使えば1秒からずくに到着出来ると思
いだしたのが5分ほど走った後。

それから能力を使ってきたのだが・・・やはり使い慣れない能力は
ダメだ。

「さて、と。テメエら、動くな」

最大限の妖力を込め、威圧する。

鬼神に並ぶ俺の妖力を込めた威圧だ。そこらの有象無象共には動け
ないだろう。

えゝ、と桜咲と龍宮は・・・ああ、あそこか。

ああ、二人とも青い顔取り越して白くなってんじゃねえか。

「二人とも、大丈夫か？」

「大丈夫、とは言い難いね・・・」

「貴方は、一体・・・」

「ん、それは後でな。先にあいつら片づけてからだ」

二人を少し離れた位置に移動させ、結界で覆う。
そして近くの鬼に近づく。

「お前らを呼びだした術者はどこだ」

「くつ、誰が言うかい・・・!」

「そうか、でも関係ないけどな」

さとの能力で心を読む。

・・・なるほど、こいつらの後ろ50mつてところか。
そのくらいの距離なら俺の妖力範囲の中だな。

「捕縛結界」

博霊の中でも封印術や結界に特化していた巫女の札を使い、結界を貼る。

鬼神クラスの化け物でも出て来ない限り、この結界が破られることはない。

「さあて、こつから先はR指定だ」

どこかで聞いた台詞を吐き、ゆっくりと近づく。

「お、お前はなんなんや!？」

「お前に答える事は何もない。吐く事吐いて死ね」

指から順に折っていく、単純だけど有名な拷問方法。
必要な情報を得るにはもつといい方法があるが、なめられるからこんな簡単に侵入を許すんだ。

徹底的に痛めつけ、辛うじて生かした状態で逃がす。
この方が西にとっても、どこにとっても脅威になる。

拷問を終えて、奴を油断したと見せかけてわざと逃がす。
呼び出された鬼達はもう帰っている。

「終わったぞ。怪我の治療は・・・寮に帰ってからでいいか」

「へ？きやつ！」

「この抱き方はどうかと思うんだけど？」

「うるせい、だまっとれ」

満身創痍という感じだった桜咲と龍宮を横に抱え、寮に向けて走る。
風の補助もあるからかなり早い、この二人なら大丈夫だろう。

「喋るなよ、舌噛むぞ」

つて、聞こえてないか。

そんな状態が5分ほど続き、桜咲の顔色が若干青くなってきた所で寮に着いた。

そのまま俺の部屋に上がり、二人を居間に降ろして目当ての物を探す。

「えーと、どこ置いたか・・・あったあった、ほれ、これ飲め」

「これは？」

「とある天才が作り上げたどんな傷や病気でも治す霊薬みたいなもん」

実際は人間が飲むと結構ヤバめな薬なんだが、こいつらなら大丈夫だろ。

霖之助とか慧音とかが使っても問題なかったし。

「これは・・・すごい、傷がどんどん治っていく・・・」

「まあ、そうだろうな。あらゆる薬を作り出せる奴が作った代物だ。そのくらいの効果があるにきまつてる。

「一体どういう交友関係をしてるのか気になるよ」

「純粋な人間の方が少ねえな。ま、人間なんてのはすぐに死んじゃまうから仕方ないけどな。

そついうお前らも純粋な人間じゃねえだろ？」

「どこでそれを!？」

桜咲は驚いたように詰め寄ってくるが、龍宮は冷静なままこちらを見つめている。

多分うすうす気づいてるんだろうな。

「当たり前だろうがよ。桜咲は半妖、なんの妖怪が混じってんのかは知らんがな。龍宮は半魔か？」

妖力や霊力ってのを知ってるか？」

魔力や気とは違う物だ。妖力は妖怪、霊力は人間、魔力は悪魔や魔法使いが持っている。

そして、桜咲からは霊力と妖力、龍宮からは魔力と霊力を感じた。

龍宮の場合は、魔法使いの可能性もあったが、銃を使うなら魔法銃などで弾切れの心配はないはず。

その事から半妖と半魔と考えた。納得できたか？」

二人とも分かったのか、俺の話を聞いて頷いていた。

「さて、怪我はもう治ったんだろ？ならもう部屋に帰るんだな。さすがに俺みたいなの部屋にいつまでも居るのは余りよろしくないぞ」

実際、夜に男性教諭の部屋に女子が訪れるなんてのは変な噂がたつてもおかしくない。
そしてそんな噂なんて立つても面白くないので二人に帰るように促す。

「いえ、その前に聞きたい事があります。
貴方は、お嬢様に手を出すつもりはありますか？」

野太刀に手を掛け、俺にそう言ってくる桜咲。
それを龍宮が止める。

「やめておいた方がいい。この人とは事を荒げない方が身のためだよ」

「ふう、龍宮の言うとおりだぜ？もし俺が気性の荒い性格で、俺と敵対した、なんて事になったらそれこそ本末転倒だ。

それにお前には俺に勝てないだろ。あの程度の鬼共に勝てないんじや話にもならん。

あと質問の答えは敵対するつもりはない。どこに手前の生徒に手を出す奴が居るよ」

「そうですか・・・申し訳ありませんでした」

「いや、いい。桜咲、明日でもいつでもいい。俺を訪ねてこい。少し聞きたい事がある」

「え？あ、はい。わかりました」

「じゃあもう帰れ」

「失礼しました」

「今日はありがとう。では失礼するよ」

二人が部屋から出て行ったのを確認すると、しばしの思考にふける。さて、桜咲と木乃香の関係についてはもう分かっている。それをどう改善するかが問題だ。

俺と桜咲が似ているとは言わないが、守るべき者が居る点では同じだろう。

そんな桜咲が木乃香から離れているなんてのは論外だ。それを改善したいと思ったから、あんな事を言ったのだ。

・・・まあ、それはまた今度考えればいいか。

今日は色々ありすぎた。少し早いがもう寝る事にしよう・・・

第三話（後書き）

ちよいと今考えてるんですが、仮契約とかどうしよう？

予定では、幻想郷にいる妖怪とか神とかの道具的なものをとか考えてるんですけどね・・・

そもそも恭が普通に仮契約するのかどうか・・・

ちなみに考えてたの（アーティファクト名）←

刹那：天魔の翼 （天魔）

龍宮：魔王の系譜 （魔王共）

茶々丸：月の科学 （月人）

宮崎：第三の目 （さとり）

綾瀬：幻想郷縁起 （阿求）

古菲：虹色門番 （美鈴） 等など・・・

思いついただけであって、本当にこうするかは決めてないんですがね。

第四話（前書き）

遅れました。申し訳ない。

さらに遅れたうえに短いっという。これはひどい。

ついでに、キャラ説明を小説の一番最初に追加しました。

おもに喧闘記のキャラを載せてます。

作者の進路の関係で、これからかなり更新が遅くなります。
重ね重ね申し訳ないです。

第四話

学園長室。

そこでは今、二人の先生が言い争っている。

一人は武幻恭。新しく配属された、幻想郷出身の人間である。

もう一人はガンドルフィーニ先生。言い争っているといっても、この彼が声を荒げているだけだが。

「なぜ闇の福音の呪いを解いたのかと聞いているんだ！！！」

どうやら、最初に呪いを解いた時にすでにばれていたらしい。

学園側にバレないようあの札渡したんだけどな・・・

「ふう、だから言ってるでしょう？」

来たる英雄の息子、ネギ・スプリングフィールドにはあらゆるものが足りない。

だからこそ、エヴァのような師が必要だと」

「それならば学園の魔法先生方でいいではないか！！！」

「貴方達『立派な魔法使い』が、ですか？」

はっ、ふざけた事抜かさないでくださいよ。そこにいる高畑先生はまだしも、貴方達は正義とはなにかを分かっていないでしょう？

どうせ、貴方達が教えたとしても、歪んだ知識を教え込むだけでしょう？

今でもネギ少年は歪んでいるみたいですし、これ以上子供の未来を壊すのは容認できません」

「我々の正義のどこが歪んでいるというのだ！？」

貴様が解いた闇の福音はかのサウザンドマスターがかけた呪い！
そんな危険な化け物の封印を保持し続けるのは正義の魔法使いの役
目だろう！」

「それですよ。

そのサウザンドマスターがどうか知りませんが、3年で解けるはず
だったんでしょう？

あの術式を見たところ、膨大な魔力で大して術式の理解もせず、強
引に掛けた様ですが、この学園の先生・・・とくにその人外っぽ
い学園長なら解けたはずです。

エヴァは何も問題を起こさなかったんでしょう？

それに加えて、10年以上も学校に通っているんです。

最初は3年で解けるはずだったのにですよ。

なら、呪いを解いた事を問題にするのはおかしいのではないですか
？」

「だが奴は数えきれないほどの人を殺して・・・」

「吸血鬼だから仕方ない、なんてのは言いませんよ。

しかし、彼女は吸血鬼だからこそ人を殺さねばならない時もあった。
それは食事だったり、護身だったり、色々でしょう。

というより、彼女は襲われなかったら人を殺さなかったんじゃない
ですか？

貴方達『立派な魔法使い』様が勝手に討伐に乗り出し、勝手に死ん
でいった。

それだけでしょう。自業自得ですよ。

それでも彼女は罪を背負っている。貴方達と違って、『自分の信念』
を持って。

貴方達はどうですか？自分だけの信念というものを持っていますか？

連合のいう、『正義』に踊らされてるだけじゃないんですか？

そしてそんな物を盾にして、自分達は逃げているんじゃないですか？

そんな貴方達にエヴァを貶す資格はないし、する事は許さない」

「くっ・・・」

「・・・そこまでしてくれんかの？

もうエヴァンジェリンの呪いを解いた事は問題にせん。じゃからここは下がってくれんか」

「・・・まあ、それならいいです。

高畑先生、学園長、後はお任せしました。では私は失礼します」

俺は胸糞悪くなりながら、出来るだけ丁寧に挨拶をして部屋を出ていく。

だから正義とかそういうのを語る奴らが嫌いなんだ。

そういう言葉を盾にし、好き放題をして、いざそれを追求されたら何も言えなくなる。

そんな奴らが教えるなんて認めない。

そんな事を思いながら、寮までの道のりを歩いて行く。

呼び出されたのは放課後、全ての職務が終わってからであるため、もう帰るだけだ。

寮まで着き、部屋に戻ろうとした時、部屋の前に誰かいるのが分かった。

「・・・ん？桜咲か」

「昨日の事で、参りました」

「・・・ああ、昨日の事か」

まいったな・・・

まだ木乃香との関係修繕の事考えてないぞ・・・
・・・ああ、そうだ。

「お前木乃香の護衛だったつよな？」

「はい、そうですが」

「なら、ほい」

桜咲の真下にスキマを開く。

そのままボツシュート。

悲鳴を上げて落ちていくが、声が小さくなっていくのが中々にシュールだ。

「と、面白がつてる場合じゃないか」

そう呟き、俺もそのスキマに入る。

行先はエヴァの家。

あそこの“別荘”とやらを使わせてもらおう。

「——あああああああ！！！」

「よいしょつと」

スキマには距離なんてのは余り関係ない。

どこに開いても、いつ開いても、座標さえ指定して開けばそこに開けるのだ。

本来、紫並みの演算能力がなければどだい無理な話なのだが、俺でも一応言った事のある場所くらいなら頑張れば開ける。

・・・偶に失敗して意味のわからん世界に繋がる事もあるが。

と、そんな事はどうでもいい。

俺は先にスキマを開き着地し、桜咲を受け止める。

軽く涙目になっているのが不覚にもかわいいと思ってしまった。

「い、いきなりなにするんや！？」

「地出てるぞ。それと余り大声出すな」

「っ！？それよりここどこですか！」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの家」

「あの人のですか！？」

「だから騒ぐなっちゅうに。余り騒ぐと迷惑だぞ」

「もう既に迷惑だ貴様ら！人の家の前で騒ぐな！」

あゝあ、エヴァ来ちまったよ。
出来れば説明しておきたかったんだがなあ。

「ん？恭と桜咲ではないか。何の用だ」

「“別荘”貸してくれね？」

「え？ええ？！」

桜咲は混乱してる。

いきなり吸血鬼の家の前に落とされて、吸血鬼が目の前に出てくればそうなるわな。

「“別荘”をか？何をするつもりだ」

「ちょっとこいつを鍛えに。対価が欲しいなら、俺の血を」

「いや、え、ちょ、は？」

混乱しすぎてまともに喋れてない。
もういいや、放つところ。

「ふむ、恭の血か・・・いいだろう。貸してやる」

「サンキュ、じゃあ早速」

「まあ待て、私も行く」

「ん？まあいいよ。面白いもんもなんもないと思うけどな」

「さて、最初に聞いておこうか。

桜崎、お前にとって守るってどういうことだと思っている？」

「守る、ですか？」

それはお嬢様が傷ついたり利用されないよう・・・」

「そうだ、それが守るということだよ。けどさ、それお前できてねえよな。

お前は木乃香を避けている。理由は知らんが、それがあいつの心を傷つけている。

それはお前が解決しなきゃならん問題だ。本当にあいつの事を思っているなら、そんな事やめてちゃんと接してやれ」

「しかし・・・それは・・・」

「それは今は置いておこう。どうせ、お前は俺があれこれ言ったところで考え方を変えるとは思えんしな。

それで、だ。心の面は置いておくとしても、他も問題だな。

昨日見た感じ、護衛として動くには経験が圧倒的に足りないだろ。

ま、お前の年でそんな経験積んでたら逆にビックリだな。

ってことで、桜崎には今から色々な戦闘スタイルの奴らと戦ってもらう」

「ちょっと待て。その考え方にお色々突っ込みたいが、まずそれを扱う人材をどうする気だ？」

別荘だから時間は気にしないでいいが、恭とてそれほど多くのスタイルを扱えるわけではないだろう」

それはそうだ。

近距離なら比べるまでもないが、遠距離のみの戦いなら俺はそれほど得意ではない。

武器を使った戦いも同上である。

基本的に無手で霊力や妖力で身体強化を施し、牽制として弾幕を放つといった戦い方なのだ、俺は。

そして、この質問に対する考えも当然考えてある。

「ま、俺が全部担当したら下手すれば桜崎を殺す可能性もあるからな。

そういうのは、ちゃんとした奴に頼むよ。

俺の知り合いだから大丈夫だろ」

そう言っつて、俺は数枚の符を取り出す。

召喚符、とでもいうのだろうか。

とある事情で俺と契約した奴らの血を使い、符に陣を描き、それを使うことで俺の元に召喚されるという代物だ。

今回はそれを使用し、紫、鬼神、天魔、龍神、ルーミア、妖忌、さとりを呼び出す。

それぞれ、紫は遠距離、鬼神は無手、天魔は空中、龍神はオールレンジ、ルーミアは力押しの剣士、妖忌は技術寄りの剣士、さとりは俺の癒しといった役目だ。

さとりは呼ばないと俺がやばい。
俺の癒し成分がなさ過ぎてやばい。

「ああ、桜崎。言っておくがこれから喚ぶのは俺の知ってる中で最強の部類に入る奴らだ。
本気でやらなきゃ殺されるぞ」

手加減なんてのは無縁の奴らばかりだしな。
死にそうになったら助けるつもりではいるが、さすがに弱いのにさ
らに出し惜しみなんてしてました、なんてのは洒落にならん。
鬼神なんてその時点でブチギレそうだ。

「は、はいっ」

俺の言葉に少し緊張した面持ちで答える桜崎。
俺からはこれ以上なにも言うことはない。

この修行に耐えれば、桜崎は今の数倍は強くなる。
恐らく、タカミチよりも、エヴァよりも、学園長よりも。

「さて、それでは始めるとしようか!」

・・・恭 side out

・・・エヴァンジェリン side

「さて、それでは始めるとしようか!」

そう奴は叫んだ。

600年もの歳月を生きた真祖の吸血鬼である私ですら、その力の底が見えない人間。

今やっているのは、奴の知り合いを召喚しようとしている事だという。

だが私でも見たことがないほど準備に手間をかけず、数枚の符を取り出すだけで行っている。

そして、一際強く奴から霊力とやらが感じられた後――

――死んだと思った。

圧倒的なまでの存在感。

まるで、最強種である吸血鬼の私ですらそこらの有象無象のごとく思えるほどの圧倒的なもの。

すべてを威圧し、すべてのものの上に立っているが如き存在感。

怖い。

これまで生きてきた中で、死と隣り合わせなんて物は幾らでも経験してきた。

その悉くを乗り越え、向かってくる魔法使い共を殺し、生き抜いてきた。

私こそが、最強の魔法使いだと、思っていた。

なんだあれは。

あんなもの、見たことも感じたこともない。

15年前、ナギと会った時でも感じなかった。

一体なんなのだ、あれは・・・

・・・エヴァンジェリン side out

・・・恭 side

「うっし、成功だな」

「ふん、これはこれは・・・錚々たる面々だな」

「クハッ、ここまでの者を呼び出すとは、珍しいのう」

「ていうか、なぜ私までここにいるのかしら・・・冬眠・・・」

「私も仕事・・・」

「あゝ♪ 恭じゃない♪」

「お久しぶりですね、恭さん」

「お久しゅう、恭殿」

上から、龍神、鬼神、紫、天魔、ルーミア、さとり、妖忌である。

「して、我らを呼ぶとは何事か」

「儂らと呼んだんじゃ、それなりに面白い事になっておるのじゃろう？」

「いや、別にそんな事はないけどな。

お前ら喚んだ理由は、ここにいる桜ざ・・・きい!？」

桜崎がいる場所を見ると、顔面蒼白なんてのが生ぬるく感じるほど真っ白く、生気を失ったような顔をした桜崎がいた。
一体なにが・・・

「貴様の呼びだした奴らのせいだろうが!！」

「エヴァ?なんでこいつらのせいなんだよ」

「そいつらの威圧感のせいでそうなってるんだろうが!私ですら薄ら寒く感じるほどのものだぞ、桜崎のような者が受ければこうなるのは当然だろう!」

ん?ん、ああ、こいつら妖怪とかの中でも強い奴らだもんな。それが桜崎やエヴァにとってはそれだけ衝撃的だったと。

それこそ、いつも対峙してる奴らとは雲泥の差どころか、天界と地獄ほども離れてるだろうし。

「恭、そのお嬢達は?」

「ん?雷光か。

ちようどいいや、あいつらにもうちよつと神気やら妖気抑えるように言っといてくれ。とくに龍神と無界さんには厳重に言っつけ」

「なんで・・・てのはその子達かい。分かった、言っておくさ」

「頼んだ。ああ、後さとりは俺んどこに来るようにも言っといてくれ」

さとりは俺の癒しだし。

「さて・・・エヴァ、桜崎どうしたらいいと思う？」

「・・・とりあえずしばらく寝かせておけばいいんじゃないか」

「そつか・・・じゃあ部屋借りるな」

部屋は・・・城の中の一部屋でいいか。

うーん、これは鍛えるよりも先に格上と対峙するのに慣れさせた方がいいかもなあ。

桜崎が動けるようになったら無界さんに全力で妖気放って貰おうかな。

それを受けて気絶しないようになったら、大抵の奴らと対峙しても気後れすることはなくなるだろうし。

桜崎を部屋まで運びながら、そう思う俺だった。

第四話（後書き）

キャラ説明に第4話時点とか書いておいてまだ修行始めてないって
いう。

仮契約のメンバーに月詠が決定しました。
ついでに千草も。

ついでに言っておくと、前回の後書きに書いたメンバー全員が仮契約するわけではないです。
今のところ決定してるのは、エヴァ、茶々丸、刹那、月詠、千草だけです。

その他は仮定の話として、アーティファクトを決めているだけです
のでご注意を。

閑話（前書き）

恭達のお話回です。

人数多いうえ口調が分かりにくかったりしたので、会話の前に名前付けてます。

読みにくかったらごめんなさい。

閑話

龍「ふむ、なるほど・・・な」

鬼「これは・・・事実ならひどいもんじゃな」

天「で、私達にこの坊を補佐するはずのあのお嬢を鍛えてやれ、と」

恭「そういう事だな。あと、雷光には別に翼の問題にも関わってもらいたい。

さとりも主にこっちを担当な。

やっぱ、こういう時って紫は便利でいいな」

紫「人を道具みたいに言わないでくださらないかしら・・・？」

妖「しかし紫殿のおかげで説明する手間も省けたのです。

恭殿もこう言っておられるが、感謝しておるでしょう」

ル「それはどうでもいいとして、もう全部私達でやっちゃえばいいんじゃないの？」

見た限り、私一人でもこの『完全なる世界』っての、壊滅くらいならできるよ？」

龍「阿呆、それをすればどのような影響が出るのか分からぬであるうが。

この造物主とやらが作った世界だ、そやつを消した途端世界が崩壊するといったのもありうる」

さ「そうですね。どうやら大戦とやらの時にも倒されただけであっ

て、殺したわけではないようですから」

ここまでの会話で分かったかと思うが、紫が「魔法先生ネギま!」を持ってきて俺が喚んだ奴全員で読んだ。

そして、その上で今後どう動くか決めていこうという算段だ。

・・・エヴァは俺が手を出さなくても問題なかったんだな。
少しへこむぞ、これは。

恭「とりあえず、だ。」

俺達が介入・・・まだしてはいないが、しかけている以上、この原作と呼べるものに何かしら変化が起こってもおかしくはない。

それに加え、俺達は魔法世界とやらで表立っては動けないだろう。下手に動いて連合に目でも付けられると面倒だしな。

殲滅するのは簡単だが、それはそれで動きにくくなる。

つてことで、桜崎他、数名を強化していく方針で変わりはない、これでもいいか?」

全員が首肯する。

大まかな流れは裏に立ってネギ達主人公組を強化していくだけ・・・というのは変わらないか。

俺達が出る可能性があるのはリョウメンスクナと、学園祭、魔法世界の最後くらいか?

鬼「ふむ・・・しかし、この月詠とやらは使えそうじゃな」

さ「それなら超もですね」

恭「たしかにな。この際ネギ達の戦力は多ければ多いほど良い。だが、表の奴らは極力巻き込ませないようにはしたいな。」

神楽坂や木乃香、明石は親や自身の生い立ちに関わっても仕方ないとしても、他の人間は普通なら魔法とは縁がない奴らばかりだ。それに、魔法って物の危険さも分かってないだろうしな」

さ「ああ・・・神綺さんと魅魔さんですか・・・」

ル「ついでにサタンもねー」

恭「あいつらマジでやベエ、あれほど死ぬかと思ったのはなかったわ」

視界を埋め尽くす炎やら氷やら水やら雷やら・・・最終的にブラックホールの的なまで創り出したり、空からデカイ剣出てきたし。あれ地味に威力でかかったし、治癒不能の概念でもかかってんのかと思うくらい治り遅かったし。

不死殺しもついてたな、あれ。絶対。

恭「ま、まあそれは置いといてだ。

魔理沙みたいにちゃんとした『覚悟』があるなら関わらせてもいいだろうが、それがない奴は関わらせない方がいいだろ。

あいつは家族に勘当されてまで魔法使いになっただけだからな。

ただでさえこっちの魔法使いは良い子ぶった馬鹿ばかりなんだ。

そんな世界に巻き込む必要はない」

龍「それだとこの淫獣が邪魔になるな」

鬼「こいつを殺せばすべて解決なんじゃが・・・」

妖「儂らがこいつを殺したとして、それが坊主の成長を妨げることになりかねませんからな」

天「そうだねえ・・・呪いでも掛けておくかい？」

恭「呪い掛けられる奴がどこにいるってんだよ」

雛や諏訪子でもいれば話は別だろうけどな。

俺も一応出来るといつても、簡単な術しかできない。

・・・いつそこっちにどっちか連れてくるか？

紫「ダメよ」

恭「まだ何も言っただろが」

さ「何考えてるか顔に出てますよ」

天「唯でさえ私達がいて何が起こるかわかったもんじゃないんだ。
これ以上不安要素を増やすのは得策じゃないさね」

ちっ、良い考えだと思ったんだが。
となれば、どうするか。

鬼「普通に脅しておけば良いんじゃないかのう」

龍「我らに齒向かえる気概があるとも思えぬしな」

天「その上で巻き込んだなら、どうしようもないさね」

恭「・・・それでいいか。

なら次だな。長谷川千雨をどうするか。

認識障害とやらの効き難い人間だ。これまでもその影響を受けてい

る。

記憶消して、認識障害効くように、つてのも考えたが、紫」

紫「完全に記憶を消すなんてことは無理でしょうね。

私の能力で障害を効くように出来ても、記憶を消すのだけはこちらの魔法使いにやらせるしかないわ。

私でも記憶を消すなんてのは・・・出来ると思うけれど、やった事がない事をいきなりするのは忍びないわね」

恭「ま、こういう事だ。で、どうする？」

ル「普通にこっちに引き込めばいいんじゃないの？」

恭「それはなあ・・・出来るだけ巻き込みたくないって言った傍から巻き込むのはなあ・・・」

さ「しかし、手立てがない以上それしかないでしょう。

危険だと言うなら、リアを付けねばいいじゃないですか」

恭「それだとさとの護衛がいなくなるだろうが」

さ「私を心配してくれるのはうれしいですけど、それでは何の解決にもならないでしょう？」

それに、こちらにいる間は危険という危険もないでしょう」

恭「・・・なら長谷川はこちらに引き込む。

そして、護衛としてリアを付ける。さとりは基本俺と一緒にいる。それでいいか」

さ「はい、いいですよ」

ニコッ、っとそんな感じの微笑んだ顔で言うさとり。
やはりさとの笑顔は良い。見ていただけで力が漲ってくるみたいだ。

ああ、本当にさとりに会えてよかった。そう思った。

天「惣気んのもそのくらいにしておいて、話はそのくらいかね？」

恭「・・・チッ、ああ、これくらいだ。じゃあ桜崎が起きたら話したようにやってくれ」

「「「「「「 応 (ええ) (はい) 「「「「「「

閑話（後書き）

ついでに千雨、超の恭PT入りフラグ？

そしてまさかの原作が原作入りという暴挙に出たようです。

8月18日追記

原作の原作入りについて：

なんでネギま！が普通に恭達の手元に渡ってんの？って思う人もいるかもしれません。

この作品の今の時系列が2002年下旬、原作連載時期が2003年2月ですので、色々矛盾してますね。

学園祭や超の時のネタバレが含まれるので余り言えませんが、独自（でもないかもしれませんが）の設定って事をお願いします。

第五話（前書き）

生存してました。

詳しくは後書きで

第五話

「クヒツ、ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」

家族を殺された。

親友を殺された。

子供を殺された。

そんな理由で関西の人間には、魔法使いを嫌う輩が多い。

彼も、そんな一人だった。

彼が魔法使いを恨む理由は今となっては定かではないが、けれど確かに彼は魔法使いを恨んでいた。

——しかし彼は狂った。狂ってしまった。

天才とは言えないまでも、秀才と呼ばれる程度の实力を持っていた彼は、関東魔法使い達の本拠地である麻帆良学園へと襲撃をかけた。そこでは、女子生徒とみられる者が二人、警備についていた。

最初は召喚した鬼達に苦戦している少女達を見て、勝てると思った。

だが、そこに情報にない男が介入する。

彼はその男が放った威圧感に気圧され、動く事もままならなかった。

男は鬼を結界に封じ込め、彼に迫った。

彼は何があっても西の情報を喋らなかつた。

指の骨を一本ずつ折られ、四肢の骨を砕かれ、神経を引きちぎられ、耐えがたい苦痛が彼を襲っても彼はその一切を喋らなかつた。

男は彼が喋らない事を理解すると、ひとつだけ彼に命令した。

「**帰れ**」と。

そこで殺されていれば、彼は狂わなかったかもしれない。

苦痛を耐え忍び、救援を待ち、ようやく彼が西に帰った時待っていたのは罵倒や失望といった非難の嵐だった。

一人で先走り、拳句情けをかけられ見逃されたのだ。

たとえ拷問を受け、それに耐えきり情報を漏らさなかったとしても、それは当たり前の事。

命を捨てて戦力を削るべきだった、などと言われる事もあった。

彼は耐えられなかった。

ふざけるな、と。貴様達はあれを知らないからそんな事を言えるのだと。

そして彼はひたすらに力を求めた。

体も癒えておらず、誰の声も聞かず、ただひたすらに復讐のためだけの力を。

そんな時、彼に近づく魔法使いがいた。

最早彼は復讐以外に考えておらず、その魔法使いの言葉を聞き、その法を求めた。

その時既に、彼は狂っていた。

[illegible]

そして彼は麻帆良へと舞い戻る。

目的はただ一つ。

——男への復讐。

「クヒ、クヒヒヒヒヒ・・・
出来た・・・これで奴を・・・」

——クヒヤ、ヒヤハハハハハハハハハハ！！！！

狂気は刻一刻と、その音を奏でながらやってくる。

さて、そんな意味深な前口上などは置いておき。

件の男、武幻恭はそんな事も知らず、麻帆良学園にてさとり達といつも通りの日常を過ごしていた。

いや、いつも通りというのは少し違う。

今、恭達が住んでいるのは麻帆良にある、とある一軒家である。
喚び出した者達を寮の部屋に全員住まわせるのは到底無理なため、
急遽空家を探し出し、買い取ったのだ。
ちなみに金の出所は紫である。

すでに恭が幻想郷の面々を喚び出し、1か月以上が経過している。
ネギが麻帆良に来るまであと一週間と行ったところまで差し迫っているのだ。

そして、既にもう原作から乖離し始めている。
まずはじめに。

ネギが担任になる事がなくなった。

これは恭が担任になり、生徒からの評判も良く、そして何より一般の先生から批判の声が上がったからだ。

ネギという少年が教育実習として来る、という情報は学園長が隠蔽していたのだが、どこからかその情報が漏れ、その結果がそれ、というわけだ。情報を流したのは恭なのだが。

そして次に、刹那が圧倒的に原作よりも強くなっている。

恐らく、原作のように月詠に後れをとる事はない。

最後に上げるとするならば、エヴァと恭の仮契約だろうか。

龍神達を喚んだあと、ほぼ意識を失っていた刹那を部屋へと運び終わり、その後の話になる。

“別荘”を借りる前に恭とエヴァがした口約束のようなもの。

それを使い、エヴァは恭を従者としようとした。

もちろん、キスという形ではなく血の交換という形で。

それを、まあなんとするか、非常識を体現したような恭である。

神綺の能力、『魔を司る程度の能力』で逆にエヴァを従者にしてしまったのだ。

エヴァとしては、最強の魔法使いと自負していた自分でも及びもつかないほど強大な者を従者にし、自分の知らぬ魔法や技術を習得しようと考えたのだらうが・・・

まあそれはそれとして、仮契約《パクティオー》をしたからには仮契約カードというのが現れる。

それもまた、恭の力の影響か色々とおかしいものであった。

アーティファクト名は『真祖の紅き月』

アーティファクトを出している間は、吸血鬼としての力を最大限に発揮できる満月の夜の状態になるのに加え、魔力も無限大になるという巫山戯具合である。

つまり、いつでも全力の状態で戦え、しかも魔力に底がないからどれだけ大技使いまくっても問題ないというわけだ。
全くもって巫山戯ている。

まあ、そんなこんながありながら恭は教師としての日常を過ごし、裏ではネギをサポートするための準備に勤しんでいた。

さて、そんな恭達であるが、今はそれぞれ別行動をとっている。

さとりと恭は家にて談笑中。今日は学校は休みである。

龍神と妖忌は刹那の修行にエヴァの別荘へと。

無界と雷光はこちらの天狗（烏族）と鬼を従えるべく関西へと。

紫とルーミアは例の如くそこらへんをぶらぶらしているのであろう。

そんな彼らの一日である。

「はあ・・・」

と、大きくため息をつく青年——年齢的には青年どころか爺を大きく過ぎているのだが——武幻恭は思考する。

なぜこんな面倒な事に首を突っ込んだのだろう、と。

本来ならば、彼は自分の妻である古明地さとりや、その妹のこいし、ペットのお空やお燐といった家族に囲まれて、楽しく、そして自堕落に生活しているはずであった。

それがどうだ。

幻想郷の危機、と言われ問題を解決すべく動いたは良いが、元々放つておいても（恐らくは）何の問題も無く終焉していくであろう物語に中途半端に首を突っ込み、そのせいで引くに引けなくなったという有様である。

そして、どうせならば改変してやろうと思いき動き続けてきているのだが……

彼とて人間である。

平日は学校で教師として働き、休日にはネギのサポートの準備にひた走る。

その上、教師という職業柄、成績が悪ければ補習をしなければならぬし、授業の進行度合いを鑑みながら臨機応変に対応しなければならない。

何せ、彼が受け持っているクラスは問題児の多い2-Aなのだ。予定通りに授業が進む事など皆無といってもいいかもしれない。

「はい、お茶が入りましたよ」

と、そう言つて恭の前にティーカップを置く女性……いや、少女といつても良い外見かもしれない。

彼女は古明地さとり。恭の妻である。

「ん、さんきゅ」

「やっぱり、大変ですか？」

「まあな・・・でもこのくらいでヘタってられんだろうよ」

「そうですか・・・頑張ってください」

ははは、と力なくに笑う恭にさとりは優しく、少しだけ心配しているのを隠すかのように微笑む。

「おう」

恭はこういう時、心配されるよりも励まされたりいつもと変わらなように接される事を好む。

別の言い方をすれば、心配されるのに慣れていないのだ。さとりのそんな細やかな気遣いに恭は感謝する。

「そういえば、雷光さんから連絡が来ていたようですけど」

「ああ、結局西では烏族や鬼の集落は見つからなかったらしい。

それで、予定を変更して今は関西呪術協会の総本山である、近衛の屋敷に向かっているとさ」

「近衛・・・ですか？」

少し不思議そうに恭に尋ねるさとり。

最初の予定にもなく、とくに行く意味もないような場所に態々出向くなど何を考えているのか、という事らしい。

「そ、近衛の家ってさ、陰陽師もいるわけだ。そして2・Aには二人、そこ出身の者がいる。さて、ここから分かるか？」

「・・・なるほど、交渉という名の脅迫ですか。随分と悪趣味ですね」

「『』名答『』」

普通ならば、この程度のやり取りで恭の思惑を感じ取るなど出来はしない。

しかし、あくまで“普通なら”である。

今は能力に制限をかけているが、長年連れ添ってきているさとりにはその程度を読むのはたやすい。

「修学旅行で西に行くのは確定だろうからな。

俺達みたいな人外連中は陰陽師や退魔師といった輩に良い思い出はないし、会いたくもない。

けど、向こうは奴さんの本拠地だしばったり遭遇、そのまま戦闘開始なんてのもあるかもだしな。

そっいうのがないよう、長にお話をな。

あと、木乃香に裏の事を教える事になるであろう事も言っという方がいいだろうし」

「反感どころか話を出した時点で攻撃されそうな事ですね」

「あの二人なら心配いらんだろうに。

どうせ、攻撃されても返り討ちにして壊滅させるとかだろうよ」

忘れてはならないが、総本山に向かっているのは鬼神と天魔という

妖怪でも最上級の強さを持つ二人である。

その強さは、幻想郷でもトップクラスである。

そして、近衛詠春がいくら紅き翼の一員で大戦の英雄といえど、人である以上時間の流れには勝てない。

全盛期でも勝負になるかどうかは疑問であるが。

「西の長が力量を正しく分析できる方であるように・・・

そして、感情を制御出る方でありますよう願います・・・」

「まあ、そんなことすら出来ないなら大戦で生き残るなんてのは無理だろうよ」

それが出来なければ、関西呪術教会という存在自体がなかったことになるだけだが。

「ま、そんな事はあの二人に任せておけばいいさ。

俺達が出来た事はもうすでにやり尽くした。

あとは、修学旅行の時に月詠と天ヶ崎千草をこちらに引き込んで、時期を見計らってこちらの戦力をネギのPTに加入させるだけだ」

「最初から恭さんが助けていれば済む話だと思っただけですね」

「クハッ、それだけはねえな！

だって俺あいつの性格嫌いだし、実際にあつて漫画と変わらないんなら速攻でぶち殺しそудだ」

割と危険な言葉を放っている恭だが、彼自身親しい者以外には容赦がない。

自分と同じように、親しい者を守ろうとする刹那には手を差し伸べ、守れるだけの力を手に入れる機会を与えが、自分が守るべき者を自

分から傷つけるような人間を好きになれようはずもない。

原作では、絡繰茶々丸襲撃という自分の生徒を傷つける・・・下手をすれば殺しているような行動をとっているネギの事など論外なのだ。

「あれも・・・一応見張っておく必要はあるか。

俺がいることで原作と乖離して茶々丸が怪我をした、なんてのは面白くもない」

「人員でいうと・・・雷光さんが適任ですかね」

「うーん、雷光が適任っちゃ適任なんだが・・・その時同時に淫獣も脅しておきたいからな。

出来れば龍神が無界さんでもあてたいところだ」

「ああ、たしかにそうですね。

あの人、妖怪とは思えないくらい人がいいですからね」

「あれで魔王の血引いてんだからなあ」

風魔雷光、種族は天魔天狗だが、天魔天狗というのは彼以外に該当しない。

天魔とは第六天魔王。

実際には、他化自在天と呼ばれるもので、実際の魔王とは色々と違うのだが・・・それは今はいいだろう

色々と面倒臭い事情を省いて説明すれば、その子供が雷光である

「けど、あの二人には刹那を仕上げてもらわねえとならんしなあ」

「人員不足、ですかねえ」

「あと残ってるのは・・・紫とルーミアか。
・・・久々にルーミアの封印解くか？」

「というより、なんで貴方はそう頑なに直接関わるのを拒むんですか」

「いや、さとりには野菜が突撃したら面倒だろ？」

「でも恭さんが守ってくれます」

「いや、まあ、うん、うん？」

「それに、私も一応は妖怪なんです。

ただ人間に無抵抗にやられると思ってるんですか？」

さとりは呆れた様に、そして少し怒った様に言う。

「そうか、そうだな。ごめん。

「じゃあ、茶々丸は俺が見にくよ」

そんなさとりには、少し驚きながらもどこか吹っ切れた様子で答える
恭。

長年付き添っていると言っても、さとりには危険が及ばないようにしようとする所はいつまでたっても変わらないらしい。

「さて、そんな感じで今後はいいんだろが・・・
今日は時間もたっぷりある。久しぶりにデートでもどうです？お嬢さん」

「ふふふ、そういうのも、良いかもしれませんね」

そう言いながら、二人は麻帆良の街並みへと消えていく。

後日、学校で恭にロリコンの噂が立ったのは完全な余談であろう。

第五話（後書き）

少々MHFでイベントが重なっていたのでそちらをやってみました。

そして文が色々安定してません。

お知らせ

えー、とてもお久しぶりです。

最近こちら（ネギま）と喧闘記の方の作品が全く更新出来ていない件ですが、只今喧闘記をほぼ全て書き直しています。

理由としましては、天魔・鬼神・恭等々の設定に矛盾が多く、作者自身も見切り発車で書き始めたため、後付け設定が増えすぎて良く分からない状態になったためです。

その関係で、ネギまの方の作品も書き直す事になります。

という事なので今の喧闘記、並びにネギまについては現段階（喧闘記は龍神終了後、ネギまはネギが来る直前）までを修正出来れば、現在の作品を削除し、新しく「東方喧闘記」並びに「魔法先生ネギまー」幻想郷から麻帆良入り」を投稿したいと考えています。

予定としましては、作者の受験が終わる1月下旬～2月中旬を予定しています。

評価してくださった方々や、お気に入り登録してくださった方々には申し訳ありませんが、また見かけましたら読んでくださるとうれしいです。

以上、作者レイクでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6490u/>

魔法先生ネギま! ～幻想郷から麻帆良入り～

2011年11月4日06時12分発行